

第三章 甲信越地方の塔

第16番 如意山乙宝寺三重塔—天台宗—

新潟県北蒲原郡中条町

松尾芭蕉も訪れ、「乙の大日」として有名な乙宝寺に、重要文化財の三重塔があると知り、巡礼に出かけました。

羽越本線中条駅から車で20分程度の日本海に沿う標高16mの砂丘上に乙宝寺があります。境内には、樹木が多くあり、春には桜、秋には紅葉が美しく、訪れる人を楽しませてくれます。

聖武天皇の勅願により行基と婆羅門僧正が開いたといわれる寺で、猿供養寺とも呼ばれ、本尊は大日如来です。猿供養寺の呼び名は「今昔物語」に載せられている猿の伝説からきています。寺の裏山に住む二匹猿が、お寺の和尚さんに木皮経を書いてもらい、その功德で人間に生まれ変わったという話です。



この寺は、檀家を持たない祈祷寺として続いています。本堂の右手前、伽藍地のほぼ中央の年月を経た深い木立の中に、三重塔は静かに立っています。この三重塔は、村上藩主・村上周防守忠勝の発願寄進により、京都の大工棟梁・小島近江守藤原吉正が元和五年（1619）に六年の歳月をかけ完成させたものです。擬宝珠勾欄付縁をめぐらし、中央板唐戸、脇間は連子窓を設け、軒は二軒繁垂木を各層平行に入れ、組物は純和様の三手先を用いています。純和様で、遞減率は小さいが、軒の出が深く、堂々として安定した姿をしています。一辺4.3m・総高24.2m、素木造りで装飾を用いず、崩れのない純和様の塔で、木々の中に美しく映えて建っています。

松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の途上に立寄って、次のように詠んでいます。

うらやまし 浮世の北の 山桜

第 17 番 蓮華王山妙宣寺五重塔—日蓮宗—

新潟県佐渡郡真野町

佐渡島に新潟県で唯一の五重塔があると知り、勇んで巡礼に出かけました。新潟港からジェットフォイルに一時乗車、両津港に着いたらバスに乗り換えて 30 分、竹田橋で下車し、徒歩 30 分で参道右手に立つ塔に、到達いたします。ここが妙宣寺の門前です。

本寺は、順徳上皇に仕え、上皇の崩御後も佐渡に残り、陵墓を守り続け、のちに阿仏坊日得となった俗名遠藤為盛とその妻・千日尼の開基と伝えられている。阿仏坊は、佐渡に流された日蓮を宗門の怨敵と責め立てましたが、却って教化され、夫人ともども日蓮を庇護し、弘安元年自宅を寺とし、天正年間に現在の地に移し、妙宣寺としました。

五重塔は、江戸後期文政八年（1825）の建立で、大工棟梁は地元相川の茂左衛門・金蔵の親子二代が 30 年の月日をかけて完成させました。初層と二層は父茂左衛門の作で、三層以上が息子によるもので、彫刻や組物に親子二代にわたる創意工夫の跡が見られます。二層以上では各層とも中央間吹き抜け、脇間は板張りです。軒は二軒繁垂木とし、初～四層は平行垂木、五層のみ扇垂木を配しています。各層は縁をめぐらしていますが、勾欄はなく、未完ではないかと思われます。おおむね和様で、一辺 3.6m・総高 24m の棧瓦葺きの塔です。



第 18 番 信濃国分寺三重塔—天台宗—

長野県上田市国分

国分寺は、聖武天皇が国ごとに建立したもので、東大寺を頂点に全国六十余寺あります。塔が現存するものは、この寺の三重塔、越後国分寺三重塔、飛騨国分寺三重塔、備中国分寺五重塔、豊前国分寺三重塔と五寺のみであります。国分寺の仏塔は、当初は七重塔であり、それらは全て滅し一基も残っておりません。跡に残っている礎石や古い記録、現存する塔などをもとに 1/10 の大きさに模型を再現したものが、大分市歴史資料館にありましたので、豊後国分寺の復元模型写真を参考に掲載しました。

上田駅からバスで 10 分ほどのところにあり、別名八日堂と呼ばれています。

信濃国分寺は、平将門の乱で全てを焼失いたしました。再建時期は、現在の塔の造営に関する記録がなく不明ですが、塔の建築様式から室町時代後期と推定され、国分寺五寺の塔では最古のもので

す。この塔は、外部は和様の伝統的な姿であります。内部は禅宗様と独特の形式をもち、この地方の塔の特色でもあります。勾欄のない縁をめぐらし、軒は二軒繁垂木で全層とも平行垂木、組物は和様三手先であるが、肘木が円弧曲線をなし禅宗様風です。一辺 3.88m・総高さ 20.1m であります。

往時の国分寺跡は、昭和 38 年から発掘調査が行われ、創建時の僧寺と尼寺の伽藍の全容が解明され、信濃国分寺史跡として残されています。



第 19 番 一乗山大法寺三重塔—天台宗—

長野県小県郡青木村

長野県青木村の塩田平を見下ろす山裾に、塔の姿があまりにも美しいので、思わず振り返るほどであるから「見返りの塔」という名でひたしまれている三重塔があると知り、期待に胸を膨らませて巡礼に出かけました。

大法寺は、別所温泉から一山越えた丘の中腹にあります。境内左手に樹齢 200 年といわれる天然記念木に指定された千本松がそびえ立ち、正面に観音堂があり、観音堂の左手背後の小高い場所に、三重塔は建っています。

詳しい寺暦は解らないようですが、創建は藤原鎌足の子・僧定慧によるとされ、大同元年坂上田村麻呂の祈願で僧義真によって再興されたといわれています。

この塔は、北朝の正慶二年（1333）に中央の工匠即ち、天王寺の四郎某らによって建立されたとされています。基壇の上に、勾欄のない縁をめぐらし、軒は全層二軒繁垂木の平行垂木としています。組物に特徴があり、一層の平面を大きく保ち容姿に安定感を持たすため、初層は二手先を用い、二層～三層は通常の三手先を用いており、これは興福寺の三重塔と同一の手法である。地方的崩れのない正規の手法と様式が、この塔を名塔にしている所以であります。純和様で、細部にほとんど装飾を用いず、堂々とした安定感のある美しい塔です。塔のデータとしては、一辺 3.65m、総高さ 18.36m、檜皮葺きで、塔の彼方に山脈が続き、春の新緑、秋の紅葉と塔の美しさが一層引き立ちます。



第 20 番 崇福山安楽寺八角三重塔—曹洞宗—

長野県上田市別所温泉

日本で現存する唯一の八角三重塔が、別所温泉にあると知り、早速巡礼に出かけました。長野新幹線上田駅で乗り換え、上田交通・別所線の終点である別所温泉駅で下車し 10 分程度歩くと寺に着きます。

安楽寺は、寺史が不明確なため年代ははっきりしないが、鎌倉時代には建長寺と深い関係を持った信州最古の禅寺です。宋時代の中国で禅の修業を終えて帰国した樵谷惟仙和尚が開山し、同行し帰化した幼牛恵仁和尚がこれを守ったと伝えられています。

山門を入った正面に大きな茅葺きの本堂があります。その脇の杉木立の中のゆるやかな石段を登りつめると、



木々の間に、八角三重塔が端然と建っています。建立時期は、鎌倉北条氏の外護によって栄えた寺で、北条氏の滅亡後このように立派な塔婆の建立は考えにくいので、鎌倉時代末期に建てられたと推察されます。平成十六年の調査結果によると、三重塔用材の伐採年代は正応二年（1289）ということが判明した。これにより少なくとも 1290 年代（鎌倉時代末期）には建立されたことが明らかになった。塔は、礎石上に直接建ち、縁もつけていない禅宗様八角三重塔で、高さは 18.8m です。初重に裳階を付けた珍しい形式である上に、細部もまた禅宗様からなった類例が少ないものです。軒は裳階を含めて全層とも二軒の扇垂木とし、詰組、波型連子、木鼻等が用いられています。内外とも巧みな意匠と、珍しい形式よりできているこの塔は、奈良の西大寺、京都の法勝寺などの八角塔婆が失われた今日、我国に残された唯一の八角塔婆であり、禅宗寺院に残る塔婆としても極めて重要な遺構であります。

第 21 番 独鈷山前山寺三重塔—真言宗智山派—

長野県上田市前山

一部が未完成にもかかわらず“未完成の完成”として愛されている三重塔が、信州の鎌倉と呼ばれている塩田平にあると知り、上田市を目指して巡礼に出かけました。上田駅からバスで30分、前山寺下で下車し、赤松と樺の美しい並木の参道を進むと小さな石段の上に、塔が見えます。茅葺きの本堂は左手にあり、塔は一段高い台地に建っています。

前山寺は、平安時代に弘法大師が開いたとも、鎌倉時代に讃岐からきた僧長秀の開基とも伝えられています。建治三年北条義政が塩田城に入ると、その鬼門に位置するこの寺を祈願寺とし保護しました。戦国時代には、武田信玄の保護を受けおおいに栄えました。

この塔は、縁の下に板囲いを用いて擬宝珠勾欄付縁をめぐらし、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木で、組物は拳鼻付の和様三手先を用いています。二・三層には、縁も勾欄もなければ、窓も扉もなく板壁で長押もありません。洞貫が外に出ているのが見えますが、縁をつける予定が未完のまま残されたのでしょう。その割には、和様と唐様がみごとに調和し、バランスの取れた簡素な美しさが人々の共感を呼んでいます。初重の外側四面には「阿闍如来」「宝生如来」「阿弥陀如来」「釈迦如来」の額があり、北側二層には「大日如来」の額も掲げられ、金剛界五仏を表しています。建立は、室町時代初期とされ、一辺 3.2m・総高さ 19.5m の和様・唐様混合で檜皮葺きの端正な三重塔であります。



第 22 番 新海三社神社三重塔

長野県南佐久郡臼田町

新海三社神社は、千曲川の上流に広がる佐久平の東部の臼田駅から線路を越えて、下仁田方面へ徒歩で 30 分ほど行った南斜面の巨大な杉林に囲まれた山麓にあります。近くには、幕末に建設された日本に二つしかない五稜郭があります。規模は函館の 1/4 程度ですが、1867 年に松平氏が龍岡城として完成させたものです。

佐久地方開拓の祖神興波岐命を主神として三つの神を奉ることから新海三社神社と呼ばれております。

参道の正面には舞殿があり、その背後には三社本殿が軒を並べています。東本殿の背後に建つ塔は、永正十二年（1515）に大工・宗仙治郎左衛門、清右衛門により建立されました。もとは神宮寺の三重塔で、現在神宮寺は上宮寺として、神社南側の集落内に移されています。塔は、基壇の上に縁をめぐるしてたっており、組物は三手先ですが、初層の軒は扇垂木で、二・三層の軒は平行垂木としているのは珍しい形式であります。初層中央間は棧唐戸、脇間はすべて板張りになっていますが、これは明治元年の廃仏毀釈の際に、仏塔を破壊から救うため神社の宝庫に見立てて使用したことによるものだという。一辺 3.77m・総高さ 18.9m の和様の強い折衷様で、屋根は柿葺き、軒の反りが大きく流麗なカーブが印象的な塔であります。



宮大工のざれごと一③とっくりの「注ぎ口の形」

お銚子の口は一箇所だけ絞ってあります。お銚子の注ぎ口はどんな形をしているように見えるでしょうか。絞ってある方を上にして見ると宝珠の形になっているのです。決して酒を注ぎやすくするために絞ってあるのではなく、神様やら仏様への祈りを込めて、こういう形になっています。ですから、酒を注ぐときは、相手に宝珠の形がきれいに見えるように、細く絞った方を上にして注ぐのが正しく、便利さばかりに目を取られてみると、肝心なことが見えなくなってしまいます。

宮大工の知識一Ⅲ五重塔の各部名称

